SCJ 47

2008年から
2009年へ

Rewrite the Future
ブルガリ125周年記念

アフガニスタンの
子どもたちが絵にした気持ち



Cover Story
[表紙]



アフガニスタン バーミヤン州サイガン郡、ジャンガラック学校での低学年の算数の授業風景です。教えている先生はアブドラ・マジャンさん。SCJの教員研修を受けたことのある先生で、「生徒たちの理解度に合わせて授業を進めるよう心がけている」と言っていました。

About Booklet
この冊子について

皆さまのご支援が子どもたちのためにどのように活かされ、何をもたらしたかをお伝えしたい。そして、子どもたちだけでなく、スタッフやSCJに関わるすべての人々のことを皆さまの近くに感じて欲しい——。この冊子は、私たちのそんな願いを形にしたものです。

SCJ 47

Contents

4 [SCJ Report] 2008年活動報告
2008年から2009年へ

6 [Global Campaign]「学ぶ」ことが、未来を変える
Rewrite the Future
ブルガリ125周年記念

8 [From Children] 子どもたちからあなたへ
アフガニスタンの子どもたちが絵にした気持ち

11 [World's Picture] どうしても載せたかった写真
アフガニスタンに咲くアーモンドの花

発　行: 社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F
Phone 03-6859-0070 (代表)

印刷協力: 株式会社コア (この冊子は、株式会社コアのご協力により印刷・製作しています)

[スタッフ]
デザイン・編集: 株式会社ピーアールハウス

皆さまのご支援が、
たくさんの子どもたちの
未来を明るくしています。

SCJ Report

2008年活動報告

2008年から2009年へ

1 日本

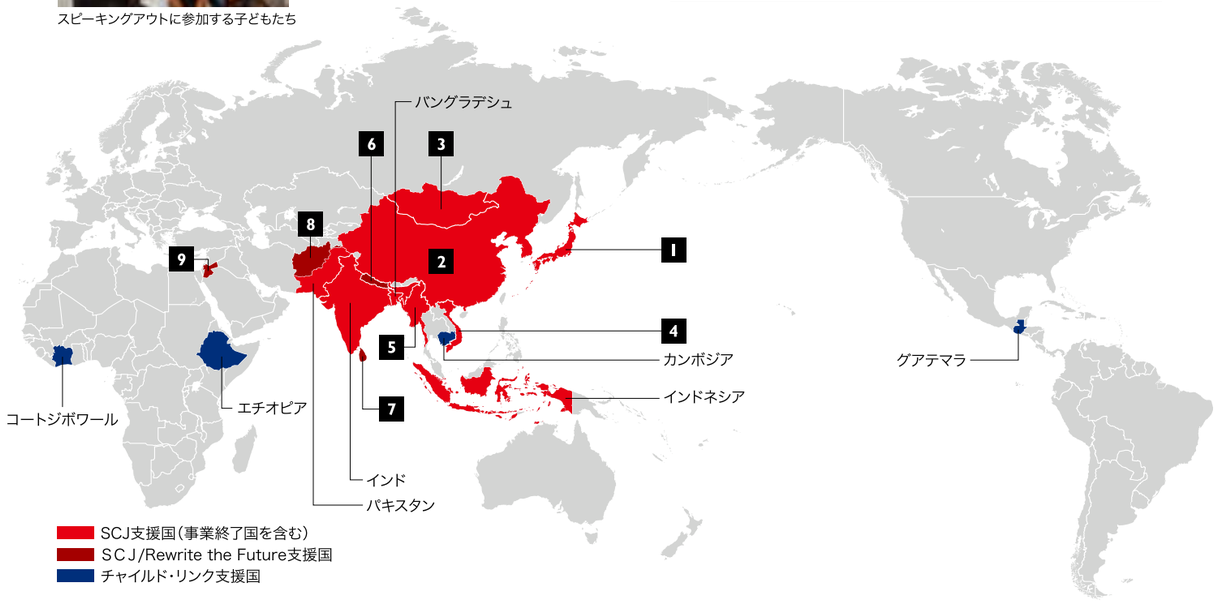


スタッフ
森 郁子

チャイルドライツセンターを中心に子どもの権利条約に定める子どもの意見表明権、暴力から保護される権利などを実現する活動を進めています。



スピーキングアウトに参加する子どもたち



2 中国



駐在スタッフ
志茂雅子

四川大地震の影響で家族のもとを離れて避難生活を送った子どもたち。被災経験を乗り越えて、一刻も早く社会に順応できるよう、心のケアを行っています。



倒壊した建物の前でたたずむ女の子

3 モンゴル



駐在スタッフ
上田雅子

ストリートチルドレンや虐待の被害にあった子どもの生活支援・指導を行うほか、学校で「ポジティブ・ディシプリン教育法」を実施し体罰を防ぐようにしています。



チャイルド・センターの子どもたち

4 ベトナム



駐在スタッフ
高谷直美

山岳部で生活が困難な状況にある少数民族の子どもたちとその家族を対象に、地域での研修や調理実習などを通して栄養改善のための活動を行っています。



北部山岳地域に暮らす子どもたち

5 ミャンマー



駐在スタッフ
和田美穂

栄養不良児たちに給食などの栄養改善のための活動を継続して行うほか、サイクロン被災者にボートや魚網を配布するなど、漁業の生活再建支援を行っています。



乾パンを受け取った子どもと母親

6 ネパール



駐在スタッフ
定松栄一

より多くの子どもたちに小学校で学び卒業するチャンスを提供するために、地域住民、学校、生徒が一体となった学校づくりをしています。



学校で元気に勉強する子どもたち

7 スリランカ



駐在スタッフ
山本俊輔

2008 年は内戦の影響を受けた子どもたちが集まって、遊んだり学んだりできる安全な場所をつくり、日常生活を取り戻せるよう支援を行いました。



カメラが大好きな村の子どもたち

8 アフガニスタン



駐在スタッフ
園田智也

アフガニスタンの山岳地帯バーミヤンの子どもたちが健康に暮らせるように、教育を通じて保健・衛生・栄養についての啓発事業を行っています。



支援を受けるバーミヤンの家族

9 ヨルダン



駐在スタッフ
高松郷子

ヨルダンで避難生活を送るイラク人難民や貧困家庭のヨルダン人の子どもたちが、質のよい教育や十分な心理社会的ケアを受けられるよう活動しています。



妹の面倒をみるマフラック村の少女

紛争下の子どもたちに「教育」の機会をつくるための活動

支援と聞くと最初に医療や食糧支援などを思い浮かべる人も多いのではないでしょうか。「Rewrite the Future いっしょに描こう！子どもの未来」は、教育支援にスポットを当てたセーブ・ザ・チルドレン初のグローバルキャンペーン。紛争の影響下にある子どもたちに適切な教育の機会をつくるために、アフガニスタン、ネパール、アンゴラなど20ヶ国以上で活動を行っています。

教育の機会どころか命の危険にさらされている子どもたち。そんな子どもたちに、「まず教育を」と決めたのには理由があります。学校に通うことができない就学年齢の子どもたちの数は、世界中で7200万人以上。その半数を超える3700万人は紛争の影響を受けた地域の子どもたちです。

紛争の影響下にある社会において教育事業はいつも後回しにされてしまいます。しかし、子どもたちに安心できる場を提供し、そして将来、彼ら自身が平和な社会を築いていくためには今すぐに教育が必要です。教育の場を広げることは、平和な国際社会を実現するための大きな一歩。2010年までに紛争地域に住む子どもたちに適切な教育を提供することが、私たちのキャンペーンの目的です。

文字を学ぶコンゴ民主共和国の女性



©ANNA KARI

Rewrite the Future

～いっしょに描こう！子どもの未来～

紛争下の子どもたちへの教育支援を目的としたグローバルキャンペーンである「Rewrite the Future」。
紛争の犠牲になり、学校に通いたくても通うことのできない子どもたちの「教育」を受けるという
当たり前の権利を守り、新たな未来を切り開くことを目的として活動しています。

教科書を読むアフガニスタンの子どもたち





ブルガリ・グループCEOフランチェスコ・トラーバニ氏とSCJ CEO渋谷

毎日、2校を開校するペースで子どもたちを学校に

キャンペーンは2006年から5年計画でスタートし、活動開始から2年が経過しました。これまで世界中から集まった約300億円もの寄付により、毎日2校のペースで学校を開校しています。570万人の子どもたちがよりよい教育を受けられるようになり、新たに81万5000人の子どもたちが学校に通うことができるようになりました。そして、数百万人もの子どもたちが以前よりも安全で幸せに毎日を送っています。より質の高い教育を提供するために、教師に対する研修も行っています。

キャンペーンを始めたとき、4300万人だった紛争地の未就学児は現在3700万人に減少しています。これはとても大きな進歩です。でも、世界にはまだまだ、私たちの支援を必要としている子どもたちがたくさんいます。何百万人もの子どもたちに教育の場をつくるという目的を達成するために、なお一層の資金を必要としています。

老舗ブランド、ブルガリも子どもたちの未来のために支援の意思を表明

そんな中、今年創立125周年を迎えるブルガリも「Rewrite the Future」に賛同の意を表明しました。セーブ・ザ・チルドレンのロゴが刻印されたシルバー製のリング（39900円）を製作、2月11日より発売します。今年末までに日本円にして12億5000万円相当（2009年1月現在）をセーブ・ザ・チルドレンに寄付することを目標にしています。ジュリアン・ムーア、スティング、ベン・スティラーなど、多くの著名人がブルガリの支援に賛同し、協力することを明らかにしたことも大きな話題を呼びました。

人権家でネルソン・マンデラの妻であるグラサ・マシェル女史は言います。「紛争の影響は一世代では終わらない。しかし、教育の恩恵は何世代も続く」

たとえば500円あれば何ができると思いますか？ ネパールでは500円の寄付で子ども1人が1ヶ月学校に通えるようになります。私たちの手で、子どもたち、そして地球の「未来」を変えることができるのです。



リングの内側にはセーブ・ザ・チルドレンのロゴが刻印されている

商品のお問い合わせは、ブルガリ・カスタマーインフォメーションまで TEL: 03-6362-0100

子どもたちからあなたへ

From Children

in Islamic Republic of Afghanistan



アフガニスタンの子どもたちが絵にした気持ち

20余年に及ぶ紛争により教育の機会が奪われてきたアフガニスタン。
そこに住む子どもたちが描き出した2枚の絵から、
あなたは何を読み取りますか？



テーマ：病院と学校
作成：ヌーリア 9才、ザフラ11才

左の建物はクリニックで、その中には黒い服のドクター（助産師）、産まれたての赤ちゃんとその母親の姿。緑の自然と鳥。鐘をならす少女。右の建物は学校。青い空と青い小川が描かれている。



「絵を描くこと」が当たり前ではないアフガンの子どもたち

ここに掲載されている2枚の絵は、アフガニスタンのバーミヤンの子どもたちの手によるものです。ひとつは学校と病院、もうひとつは自分たちの村について描かれたもの。絵を見て、皆さんはどんな想いを抱くでしょうか。

文字を読むこと、絵を描くこと。日本では国民のほとんどの人が当たり前のように言葉を理解し、絵を描いたりします。アフガニスタンの、特にバーミヤンの子どもたちにとってそれは困難なことなのです。

バーミヤンは冬になれば氷点下40℃にもなる厳しい寒さが5ヶ月も続き、交通の便も悪く、アフガニスタンの中でも教育レベルの貧しい地域。SCJでは、バーミヤンを中心に活動し、復興支援の一環として、学校の建設・修復、教師研修、地雷回避教育など、子どもたちへの教育支援を行ってきました。子どもたちは皆さんの支援で学校に通えるようになって初めて、「絵を描く」ことを知ったのです。

彼らが描いたものは胸を締めつけられるものも多いですが、絵を通して自分の内面を表現できるようになったことは、飛躍的な進歩です。何より今、子どもたちが「絵が描ける環境にある」ということは、アフガニスタンの人々にとっては大きな意味を持ちます。

20年以上の紛争が人々から教育の機会を奪ってきた

アフガニスタンは、1973年の軍事クーデター、79年の旧ソ連侵攻、そして2001年の米国同時多発テロ後の空爆と、20年以上に渡り紛争の影響を受けてきました。紛争は全体で約3分の2の校舎を破壊し、長い間人々から教育の機会を奪ってきました。



バーミヤンは首都カブールから西へ約240kmに位置する

2001年以降、積極的な教育支援が行われ、アフガニスタン全土で学校に通えるようになった子どもたちは、それまでの7倍にも増加しました。しかし、バーミヤンでの学校就学率は、50％（男62％、女38％）と全国平均を下回ります。その結果は、そのまま識字率の低さにつながり、国語であるダリ語の基本的な読み書きができる15歳以上の男女は、アフガニスタン全土では34.5％、バーミヤンに限れば、25.5％（男45％、女6％）に過ぎません。

授業料が無料でも、貧困のため仕事の手伝いを優先しなくては





テーマ：わたしたちの村、バーミヤン
作成：ハキマ 9才、チャマン8才

のら仕事をする男性、小川で洗濯する女性。黄色の建物は学校。黒い制服を着てその学校に通う女学生たち。学校に通う時間だが、空を見上げると大きな星が見える。

ならず、学校に通えない子どももたくさんいます。小学校5年生になっても学校に通い続けられる子どもは3人に1人程度なのです。

子どもたちにとって学校に通うことは何よりの喜び

支援により学校に通えるようになった子どもたちは、「自分の名前が書けるようになった」と屈託なく笑い、学ぶことの喜びを小さな体いっぱいにかみしめています。



熱心なまなざしで授業を受けるバーミヤンの子どもたち

「学校に行きたかったけど、家のお手伝いを任されて小学校に通えなかったから、学校に通えるようになって本当にうれしい。文字を習うのは初めて。妹にもアルファベットと算数を教えてあげたわ」と語るのは、ガウパリダ村から通う13歳の少女。16歳で小学校に編入した少年もいます。「小学校2年生の時、病気で学校を中退したんだ。父さんは8年前に亡くなったから、それ以来、僕が働いて母さんや弟の面倒をみている。16歳で、小学校に編入するのは恥ずかしいよ。でも、読み書きをもう一度勉強したくて決意したんだ」

岩窟で暮らすファティマという少女に、もしもバーミヤンの知事だったら何をしたいか尋ねると「自分のように岩窟で暮らす子どもがいなくなるようにしたい」、もしも神様だったら何がしたいかと尋ねると「争うことがない世の中にしたい」と答えました。経済的にも体力的にも厳しい生活を送っている彼女は平和を望み、人を思いやる気持ちを持っているのです。「ずっと勉強を続けたい。将来、カブールの学校で先生になって、子どもたちにダリ語を教えたい」とファティマは夢を語ります。

誰よりも平和を願い、学校に通えることに純粋に喜び、感謝する子どもたち。未来のアフガニスタン、そして平和な世界を築くのは、そんな子どもたちなのです。皆さんの心には子どもたちのどんな気持ちが届きましたか？

ファティマ（写真中央）は10人家族。雨風をしのぐために、大仏遺跡の横にある岩窟で暮らしている







＊アフガニスタンは「Rewrite the Future」の支援対象国の1つです。





桜に似たアーモンドの花

World's Picture

どうしても載せたかった写真

アフガニスタンに咲くアーモンドの花

アフガニスタンでは、新学期のスタートは3月末。日本の子どもたちが桜とともに新しい学年を始めるように、アフガニスタン・バーミヤンの子どもたちは、アーモンドの花のもとで新学期を迎えます。

この写真は昨年4月1日、事業地サイガンへの移動中に撮影したもの。山の峰にはまだ雪が残り、冬のなごりの凛とするような寒さが身に染みる早朝でした。

アーモンドの花はアフガニスタンでは一般的なもので、バザールでも国産のアーモンドの実が売られていますが、花をじっくりと目にしたのはそのときが初めて。その美しさに見とれ、何度も何度もシャッターを切る私を、ドライバーは微笑みをたたえてただ見つめていました。

アーモンドはアフガニスタンの長く厳しい冬が終わる頃、花を咲かせます。日本で満開の桜の花に目を細めるとき、厳冬の後に咲くアーモンドの花のように力強く生きるアフガニスタンの人々に思いを馳せる人が、少しでも増えたらうれしく思います。

園田智也（SCJスタッフ）

Editor's Note

編集後記

ニュースレターのリニューアルを担当することになってから、どんなことを読者の皆さまに伝えていこうかと、アレコレ試行錯誤する時間を楽しみました。そんな昨年末、パレスチナ自治区のガザで空爆が始まり、多数の子どもたちも犠牲になっていることを知りました。日々、安全な場所で自分の意思で暮らす私と、危険や恐怖に生活を支配されてしまう子どもたち。同じ時間を共有しながらも、こんなにも人生が違うのかと、改めて気づかされました。今、子どもたちは何をして、どんなことを考えているだろう…。そのことをいつも心に留めて、ニュースレターをつくっていきたいです。

岡田 茜（SCJスタッフ）



発行：社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン